古今集の時代
――「神代」と和歌

山本登朗
（やまもと・とくろう）

一

『土佐日記』の正月二十日、悪天候のため室津に留まり、すでに八日目を迎えた夜の記事に、唐土の海岸で同じ二十日の月を見て歌を詠んだ阿倍仲麻呂のことが、次のように記されている。

二十日の夜の月出でにけり。山の端もなくて、海の中よりぞ出で来る。かうやうなるを見てや、むかし、阿倍仲麻呂といひける人は、唐土に渡りて、帰りきけるときに、船に乗るべきところにて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見てぞ、仲麻呂のぬし、「わが国にかかる歌をなむ、神代より神もよんたび、いまは上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しびもある時にはよむ」とて、よめりける歌、

青海原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも

とぞよめりける。かの国人、聞き知るまじく思ほえたれども、言の心を、男文字にさまを書き出だして、このことば伝へたる人にいひ知らせければ、心をや聞きえたりけむ、いと思ひのほかになむ賞でける。唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

歴史上の仲麻呂は、この時すでに在唐三十数年。いまそれは持ち出さないにしても、「かの国人」と親しく交わり、「かしこの漢詩」まで作り交わしている仲麻呂は、自作の

和歌の「言の心」を、唐土の言葉を使って自由に唐土の人々に説明できたはずである。その仲麻呂が、なぜ歌の内容を説明するために、わざわざ「ここのことば伝へたる人」すなわち通訳の助けまで借りなければならないのか。貫之は、この場面を、なぜそのように描き出しているのだろうか。

萩谷朴氏は『土佐日記全注釈』（昭和四二年・角川書店）でこのことを問題とされ、香川景樹や田中大秀の見解を紹介されたうえで、「これは、貫之が年少読者を意識しての処置であって……あらかじめ話を合理化して、年少者にも納得がゆくようにしておいたものかと思われる」と述べておられるが、通訳の登場がなぜ「年少読者」のための「合理化」になるのか、なお疑問が残る。ここには、年少読者のためだけではない、より深い貫之の意図があったのではないか。前半部では唐土の人たちと自由に会話していたように見える仲麻呂が、この場面に至って突然、唐土の言葉を話せない、きわめて一般的な日本人へと変身する。何気なくおこなわれているこの操作の背後には、日本人を代表するかのように和歌を詠み和歌を語る仲麻呂を、国境を越えた国際人ではなく、唐土とはあくまでも一歩距離を置いた日本人の代表として描き出そうとした、貫之の強い意向が隠されているように思われる。日本人阿倍仲麻呂が詠んだ和歌が、言葉の違いを越えて中国人の心にまで届き、賞賛を得た。和歌にはそれだけの力があると、貫之はここで強調するのである。

『古今集』の「真名序」は、和歌がいったん衰退した理由を、「大津皇子」以来「彼の漢家の字を移して、我が日域の俗を化」したこと、すなわち漢詩の隆盛にあったとするが、それに対して「仮名序」は、漢詩の日本への到来にはまったく言及せず、「いまの世の中、色につき、人の心、花になりにける」、すなわち人々が華美ばかりを追い求めたために、和歌は「まめなる所には、花すすきほに出すべきことにもあらず」という衰退した状態に陥ったのだと説明する。「仮名序」では、和歌は和歌だけの自立した存在として、漢詩の存在を排除した形でその盛衰の歴史が語られているのである。いま両序の作成順や筆者の問題には触れないが、さきの『土佐日記』の記述に見られた不自然な設定と、この「仮名序」の姿勢には、和歌が漢詩とはまったく別個の、自立した存在であることをことさらに強調しようとする貫之の姿勢が、共通してあらわれているように思われる。

平安朝和歌が、『白氏文集』をはじめとする漢詩の強い影響下のもとに、万葉時代の和歌とは異なった性格の歌として再生したことはいまや言うまでもないことであり、貫之自身の和歌にも漢詩文から多くの表現が摂取されていることが、近年も指摘され続けている。また一方で、滝川幸

司氏の「宇多・醍醐朝の歌壇と和歌の動向」（『古今和歌集研究集成・第一巻』平成一六年・風間書房）でも指摘されているように、当時、まだ和歌は公的文学として十分に認知されていたわけではなく、漢詩の方が公式の席では圧倒的に優勢であった。そのような状況の中にあって、貫之は強い思いを込めて、漢詩から自立して存在する和歌の姿を、あえてこのような形で世に示そうとしているように思われるのである。

二

さきに見た『土佐日記』の記事の中で、仲麻呂は唐土の人々に対して、和歌について「わが国にかかる歌をなむ、神代より神もよんたび、いまは上中下の人も、かうやうに別れ惜しみ、喜びもあり、悲しびもある時にはよむ」と説明していた。ここで仲麻呂は、と言うよりも貫之は、ことさらに「神代」に言及し、「神代」から「いま」まで詠み続けられているものとして和歌を紹介している。『古今集』の「真名序」には、「神代七代」には和歌はまだ作られていなかったが、素戔嗚尊（すさのおのみこと）に至って初めて詠まれ、「人代」に入って大いに盛んになったと述べられている。「仮名序」の記述内容は「真名序」とはかなり異なっており、天地開闢の時から和歌は始まっていたとするが、「神代」から和歌が詠まれていたことをことさらに述べている点では、両序は共通している。『土佐日記』における仲麻呂の説明は、『古今集』の両序の言うところと基本的には同一であったと言ってよい。さらに、『古今集』巻十九に収められている貫之の「古歌奉りし時の目録の、その長歌」の冒頭も、これらと同じように、

ちはやぶる　神の御世より　くれ竹の　世々にも絶えず……

と詠み始められていた。言うまでもないことだが、同じ勅撰集でも、漢詩文の集である『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』の序文には「神代」の語は見えない。漢詩とはまったく別個なかたちで、和歌だけを支え意味づけてくれる存在の根拠として、貫之はくり返し、このように「神代」を持ち出しているのである。

秋山虔氏の「平安文学の諸問題」（『新日本史大系・古代社会』昭和二七年・朝倉書店）や藤岡忠美氏の「古今集時代の意義」（『解釈と鑑賞』昭和三八年一月、後に『平安和歌史論』に収録）等でも注目されてきたように、嘉祥二年（八四九）三月二十六日には、興福寺の大法師たちが仁明天皇の四十の賀を祝うために、さまざまな品に添えて、三百句を越える長大な長歌を献上している（『続日本後紀』）。その長歌には「唐の詞（ことば）を仮（か）らず　書き記す　博士雇はず」

と、漢詩文ではない和歌の独自性が述べられており、またさらに、

……日の本の　倭の国は　言玉の　当（幸）ふ国とぞ
古語に　流へ来たれる　神語に　伝へ来たれる　伝へ
来し　事の任まに　本の世の　事尋ぬれば　歌語に
詠ひ反して　神事に　用ゐ来たれり　皇事に　用ゐ来
たれり……（訓読は倉野憲司氏『上代日本古典文学の研究』―昭和四三年・桜楓社―による。）

と、「神事」や「皇事」には本来「歌語」すなわち和歌が用いられるものであることが、はっきりと主張されているが、しかしながらそこには、和歌が「神代」から詠み継がれてきたことへの言及は、特に見られない。和歌の存在の根拠としてこのように「神代」を持ち出す貫之の方法は、自立した和歌を支え、勅撰集『古今集』の成立を支えるための、いわばひとつのレトリックとして、貫之自身によって生み出されたものではなかったかと考えられるのである。

三

「神代」ないしは「神の御代」という語は、『万葉集』の和歌には数多く詠み込まれているが、それ以降、少なくとも現存する和歌に関する限り、『古今集』の時代に至るまで、ほとんど歌に詠まれることがなかった。その希少な用例が、『古今集』にも収められている、在原業平の次の二首である。

二条后の東宮の御息所と申しける時、御屏風に竜田川にもみぢ流れたる形を書けりけるを題にてよめる

ちはやぶる神代も聞かず竜田川唐紅に水くくるとは

（『古今集』・巻五・秋下・二九四）

二条后の、まだ東宮の御息所と申しける時に、大原野に詣で給ひける日、よめる

大原や小塩の山も今日こそは神代のことも思ひ出づらめ

（同・巻一七・雑上・八七一）

最初の「ちはやぶる」の一首は、まだ「東宮の御息所」と呼ばれていた二条后の命を受けて、屏風の絵を題にして、素性とともに詠んだ作。業平はその屏風の絵の情景を、川の水を括り染めにしたようだと見立て、水を括り染めにするという常識を越えたできごとは、不思議なことが数多く起こった「神代」にさえあったとは聞かない、と述べて、屏風の絵の美しさを賞賛している。次の「大原や」の歌は、同じく「東宮の御息所」時代の二条后が藤原氏の

氏神である大原野神社に参詣した際、その参詣を祝って詠んだ一首。詞書から見て、業平はおそらく大原野には供奉せず、祝賀の歌だけを奉ったと考えられる。この歌の「神代のこと」がどのようなことをさしているかについては諸説があるが、当日の参詣の行列の、この世のものとは思えないほど盛大な様を、まるで神代のようだと神もお思いになるでしょうと述べて、華麗な参詣を祝賀した一首と考えておくのが妥当であろう。

業平のこの二首は、ともに、皇太子の母として次の国母になることが決定している「東宮の御息所」すなわち後の二条后をほめたたえて献上されたものであった。そうである以上、この二首の「神代」の語は、『万葉集』で多くの歌人たちが詠んでいたのと同じように、天皇家の祖先神の系譜を語る『日本書紀』や『古事記』等の「神代」、すなわち日本神話の「神代」の意で用いられているものと考えられる。業平はこの二首の歌の中で、ことさらに「神代」を持ち出してみせることによって、次代の天皇の母である二条后をほめたたえ、祝福していたと考えられるのである（山本「伊勢物語の日本神話―在原業平と「神代」―」『論叢 伊勢物語2』平成一四年・新典社）。

『古今集』成立の前後までの平安時代の和歌に、業平のこの二首以外に「神代」の語を詠み込んだ作を見出すのは容易ではない。いま発見できるのは、わずかに、凡河内躬恒の次の一首のみである。

神代より年をわたりてあるうちに降りつむ雪の消えぬ白山（しらやま）

（西本願寺本『躬恒集』・二六二）

しかしこの躬恒の歌には、日本神話の「神代」をことさらに持ち出して天皇や皇族を賛美する業平歌のような手法は見られない。業平の二首は、この時代にあって他に類例を見ない、きわめて突出した詠作であった。業平はこのような「神代」の表現を、おそらくは次のような古歌を通して学び取ったのではないかと思われる。

大君の遠（とほ）の朝廷（みかど）とあり通ふ島門（しまと）を見れば神代し思ほゆ

（『万葉集』・巻三・三〇四・柿本人麻呂）

神代より吉野の宮にあり通ひ高知らせるは山川を良（よ）み

（『万葉集』・巻六・一〇〇六・山部赤人）

さきに見た、嘉祥二年三月に興福寺の大法師たちが仁明天皇の四十の賀を祝った長歌にも、「神事に　用ゐ来たれり　皇事に　用ゐ来たれり」と、「神事」や「皇事」には和歌が用いられてきたことが述べられていた。また、この当時、約三十年に一度、宮中で『日本書紀』の講義が開かれ、その終了後の宴席では、『日本書紀』の内容をテーマにした和歌が詠まれていた。現在も残る『日本紀竟宴（きょうえん）和

歌』である。日本神話を持ち出して天皇やその周辺を賛美することが、漢詩には不可能な、和歌だけに許された方法であることを、業平は十分に自覚していたように思われるのである。

四

業平は、この二首の歌の中で、『古今集』の両序や『土佐日記』のように、和歌が「神代」から詠み継がれてきたものであることを、特に述べているわけではない。しかしながら、この業平の歌の「神代」と、さきに見た貫之の「神代」には、大きく似通った点が見出される。双方がともに皇室につながる日本神話の「神代」の意味でこの語を用いていることはともかくとして、より注目されるのは次のような点である。

「ちはやぶる神代も聞かず」の一首は、「神代」にも聞いたことのない不思議なできごとが、いま目の前で起こっていると言い、もう一方の「大原や」の歌は、「神代」をも思い出させるような、それに匹敵する盛事が、いままさに実現していると述べる。さきに掲げた人麻呂や赤人の歌では、「いま」と「神代」が重ねられたり、「神代」と「いま」の連続性が強調されたりして皇室の尊さが強調されていたが、業平の歌ではそれとは逆に、「ちはやぶる神代も聞かず」の作からはっきりと知られるように、「いま」はむしろ「神代」と断絶し、「神代」を越えて輝いている。「大原や」の歌は一見、さきの人麻呂の歌に似ているようだが、実はそうではなく、作歌主体の業平自身は、人麻呂とは異なり、自分自身で「神代のこと」をありありと思いうかべることが、もはやできないし、また、それを求めてもいない。ここでは、「神代」はただ、「いま」すなわち二条后の、次代の国母としての栄華を根拠づけ、ほめたたえるために持ち出されているのである。

業平の歌に見られる「神代」と「いま」のこのような関係と同一の事情は、『古今集』の両序にも、同じように見ることができる。「真名序」では、素戔嗚尊に至ってようやく和歌が詠まれるようになったと述べられた後、続いて「ここに人代に及びて、此の風大きに興る」と記され、そのさまが「譬へばなほ、雲を払ふ樹の、寸苗の煙より生じ、天を浮ぶる浪の、一滴の露より起るがごとし」と譬えられている。一方の「仮名序」では素戔嗚尊は「人の代」に入れられている（奥村恒哉氏『古今集の研究』―昭和五五年・臨川書店―参照）が、その時にはじめて歌の文字が三十一文字に定まったと述べられた後、「遠き所も、出で立つ足もとより始まりて年月をわたり、高き山も、ふもとの塵泥より成りて、天雲たなびくまで生ひ上れるがごとくに、この歌もかくのごとくなるべし」と、「人代」におけ

る歌の繁栄ぶりが述べられている。両序では、この後、前述のように和歌の衰退がそれぞれの形で説明された後、「いま」における和歌の復活と隆盛が、

適(たまたま)和歌の中興に遇(あ)ひ、以(も)ちて吾が道の再び昌(さか)りなることを楽しむ。（真名序）

貫之らがこの世に同じく生まれて、このことの時にあへるをなむよろこびぬる。（仮名序）

と賛美されている。「神代」から詠み継がれてきたことを重視し、そのことを和歌の存在の根拠のように持ち出しながら、『古今集』の両序は、「神代」よりも「人代」になって和歌はより発展し、その後、一時の衰退を越えて、いま、繁栄は再び頂点に達したという。ここでも、業平の二首の歌と同じように、「いま」は「神代」に支えられながら、「神代」を越えて輝いている時として、強く賛美されているのである。

五

『土佐日記』の中には、次のように、在原業平の名前が二度登場している。

（一月八日）……今宵、月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の「山の端逃げて入れずもあらなむ」といふ歌なむ思ほゆる。もし海辺にてよまましかば、「波立ちさへて入れずもあらなむ」ともよみてましや。……

（二月九日）……かくて、船曳(ひ)きのぼるに、渚の院といふところを見つつ行く。その院、むかしを思ひやりて見れば、おもしろかりけるところなり。…ここに人々のいはく、「これ、むかし、名高く聞こえたるところなり」「故惟喬(これたか)の親王(みこ)の御供に、故在原業平の中将の、

世の中にたえて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし

といふ歌よめるところなりけり」。……

業平の妻は紀有常の娘であり、惟喬親王の母は有常の妹だが、貫之はその有常の従兄弟の孫にあたる。右の引用部には、「業平の君」という呼称をはじめ、貫之の業平に対する親愛の情があふれていて、血族関係の存在がいかにも実感されるのだが、業平と貫之をつないでいる系譜は、ただそれだけにとどまるものではなかった。鈴木宏子氏は「古今集の恋歌」（『古今和歌集研究集成・第二巻』平成一六年・風間書房）の中で、『古今集』恋部における業平歌の存在の重要性に注目され、「……『古今集』の恋歌が新たな局面に進もうとする展開点には、しばしば業平の歌が現わ

れる。このことは撰者たちの意識的な方法によるのだと考える。『古今集』恋歌が現在のかたちになるためには、業平の歌の力がぜひとも必要だったのである」と、注目すべき見解を述べておられるが、貫之にとっての業平歌の重要性は、恋歌だけに限られたものではなかったはずである。さきの『土佐日記』に引かれていた歌も恋歌ではなく、どちらも惟喬親王との私的な君臣関係の中で詠まれた詠作であった。貫之にとって業平は、さまざまな面において、仰ぎ見るべき先達であったと考えられる。

その業平は、二条后とその子の陽成天皇に親しく仕え、歌人として、和歌の中に「神代」の語を用いて、その「神代」にもまさる二条后たちの「いま」を、漢詩には不可能なレトリックで祝福していた。和歌を自立した存在として位置づけるために、貫之は、結果的に、そのような業平の姿勢と方法を模倣し、それを継承していると考えられる。

『古今集』の「仮名序」の末尾は、次のようにしめくくられている。

……歌のさまを知り、ことの心を得たらむ人は、大空の月を見るがごとくに、いにしへを仰ぎていまを恋ひざらめかも。

『古今集』の時代に対する、つまりは下命者である醍醐天皇の御代に対する、貫之の過剰なまでの自信と賛美の表現は、「神代」と「いま」の上述のような関わりの構造に支えられることによって、はじめて可能であった。和歌の根拠を「神代」に求めた貫之の発想は、その後ながらく、おそらくは千年以上にもわたって、和歌という文学の形式を支えつづけてゆくことになるのである。

――関西大学教授――